夏目漱石芥川龍之介論考

——目　次——

第Ⅰ部　夏目漱石論考　1

ロンドンの漱石、帰ってきた漱石
——「渡航日記」・クレイグ・オックスフォード——……3
漱石の美術への関心——*THE STUDIO* の剥ぎ取られた絵——……13
夏目漱石における朝鮮——朝鮮人モ居ル是モスキダ——……27
「坊っちゃん」の家族愛……51
「吾輩は猫である」と「坊っちゃん」
——「落雲館事件」と「咄喊事件」をめぐって——……63
「野分」の構造と主題——高柳と中野の関係を手がかりにして——……71
汝の目のまへに取て——「三四郎」の構図——……83

美禰子の結婚――「主体的な選択」・明治民法――……93
第Ⅰ部　夏目漱石論考《付録》　103
漱石の父直克は「なおかつ」か「なおよし」か……105
漱石文庫蔵「博士号辞退に関する文献」について……113
一平と「漱石先生」……119
漱石の「貸した本」（翻刻と解説）（仁平道明・河合隆司）……131
第Ⅱ部　芥川龍之介論考　139
芥川龍之介「野呂松人形」の創作方法――体験の虚構――……141
「芋粥」の構図……165
芥川龍之介の〈仮構の生〉――その創作の機構――……185
芥川龍之介と『禅林句集』――「百草」「夜来花」「愁人」「空中花」――……203
やさしい偸盗たち――芥川龍之介における〈救済〉と〈ゆるし〉――……223
慌しく遠のいて行くもう一人の足音――芥川龍之介「地獄変」試読――……235
芥川の二つの「尾生の信」……267
「藪の中」とO・ヘンリの「運命の道」……293
〈「藪の中」とO・ヘンリの「運命の道」〉再論……309
「雛」試論――「意地の悪い兄」のためのレクイエム――……339
芥川龍之介における〈歴史〉――「雛」・開化・蝙蝠傘――……353
「一塊の土」試読――「情ない」「一家」への嘆き――……371

芥川は「鼻」を読んだか……381
〈開かれた結末〉〈閉じられた結末〉の二元論をこえて……387
初出等一覧……399
あとがき……405

漱石の美術への関心

――*THE STUDIO* の剥ぎ取られた絵――

夏目漱石の美術、特に絵画への関心と受容、その文芸と美術との関わり、漱石自身の絵画の創作については、既に多くの調査・研究がある。日本国内で刊行されたものだけでも、佐渡谷重信『漱石と世紀末芸術』（一九八二年二月、美術公論社）、芳賀徹『絵画の領分　近代日本比較文化史研究』（一九八四年四月、朝日新聞社）、尹相仁『世紀末と漱石』（一九九四年二月、岩波書店）、新関公子『「漱石の美術愛」推理ノート』（一九九八年六月、平凡社）、范淑文『文人の系譜――王維～田能村竹田～夏目漱石』（二〇一二年三月、三和書籍）他の単行本や多くの論文・評論等があり、さまざまな角度から漱石と美術との関わりについての調査、考察が行われてきた。しかしながら、そうした問題を解明するための基礎的な調査はまだ十分とは言いがたいのではないか。西洋美術への関心についての調査・研究に限ってみても、これまでの調査とその報告は、限定された範囲にとどまっているように思われる。

よく知られるように、東北大学附属図書館の漱石文庫の中には、英国留学中また帰国後に入手したロンドンの美術館のカタログ、絵画の複製、画家に関する著書や図録、美術雑誌等の西洋美術関係の多くの資料がある。それらの資料に関しても、前掲したような研究によって明らかにされた部分もあるものの、従来の報告には正確ではない点もあり、また資料の全体像、そこから見えてくる問題についての見通し等に関しても、これからの研究に俟つところは多い。

漱石文庫に関する調査に関わってきた筆者は、「夏目漱石の文芸と美術との相関―漱石文庫資料による実証的研究」の題目で科研費（基盤研究（C）／研究課題番号：25370225／平成二十五年度～二十七年度）の交付を受けて、美術関係

芥川龍之介「野呂松人形」の創作方法

——体験の虚構——

はじめに

『人文』大正五年（一九一六年）八月号に掲載された芥川龍之介の「野呂松人形」については、吉田精一『芥川龍之介』[1]、片岡良一『芥川龍之介』[2]等の断片的な言及や、片岡哲「野呂松人形」[3]、同「野呂松人形」[4]、中島和也「野呂松人形」[5]等の比較的短い解説的な文章はあるものの、管見によればそれを対象とした単独の論文もなく、十分な検討が加えられてきたとは言いがたいように思われる。

小稿では、その「野呂松人形」について基礎的な検討を加え、「僕」が体験したことを書いているように設定されている「野呂松人形」の作品世界が、芥川が実際に体験したことではなく、〝野呂松人形〟に関する、ある資料——『都の華』〈『都新聞』毎月附録〉第五十七號（明治三十五年〈一九〇二年〉八月二十三日発行）掲載の「野呂松人形」と題する文章の記述を用いて創作されたものであったこと、「僕」すなわち「作者」と錯覚させ、そこで語られることが「作者」の体験であるかのように錯覚させるその方法が、比較的初期から芥川が用いてきた創作方法だったことを、明らかにしたい。